Planned Happenstance（プランド ハップンスタンス）随想
［第 2 話］山岡望先生と旧制高校教師像

藤平　正氣（昭和 44 年応化卒業）

はじめに

［第 1 話］は，「日高敏隆先生と動物行動学」．これは，昨年の国大化学会誌・第 6 号で紹介した．“Planned Happenstance” をオムニバス・シリーズ化しようと，今，そのつづきを書き始めた…．このような幸せ，毎朝，禅宗二経と真宗二経のお勤めの中でも感謝している．偶然の出会いが必然の導きを源流とする，その事例は尽きない．

旧制高校を知らない私ですが，［第 2 話］では，父親世代や大先輩諸兄からのお話し，そして数冊の書誌から勉強できた感慨を “Planned Happenstance” に込めて紹介する．

“戦前の旧制高校には，人格形成そして夢と挑戦への動機付けを先導する名物教師がいた…．”，“旧制高校と旧制大学は，成長過程での教育と研究での役割を分担できていた．世間も大成を期待し好意的に暗黙の声援を送っていた…．” 私の多感な昭和 30 年代後半，すでに聞えてきた話しである．私は，全国寮歌祭での馴染み歌をコンパで放歌高吟した時期もあり，寮歌とカラオケ演歌を楽しんだ最後の世代だろうか？

郷里の科学者，鶴田禎二先生との面談ご縁で，先生が理想の師と仰いできた旧制六高（岡山）・山岡望先生を知り，その人となりや生き方に深い関心を抱くに至った．

山岡望先生

山岡先生は，明治 25 年（1892 年）3 月 27 日生まれ，大阪府出身，旧制岸和田中学，旧制一高，東京帝大理科化学科で修学された．大正 5 年（1916 年）8 月，直ちに旧制六高の講師として奉職し，翌大正 6 年（1917 年）に 25 歳で教授へ昇任，大正 9 年（1920 年）に 28 歳で化学教室主任を拝命された．そして，旧制高校の終焉を見届ける昭和 25 年（1950 年）3 月に至る約 33 年半，化学の研究や講義実験による教育，課外活動への声援，談論風発に集う梁山泊の師表，等々を通じ，数多の俊英を輩出するに甚大なる成果を上げられた．

鶴田先生は，『化学と教育，43 巻 3 号（1995 年）』で，“山岡先生は生涯娶らず，明治・大正・昭和と狂瀾怒涛の時代を生き抜き，旧制高校教授として新しい化学教育を創始・実践されたばかりでなく，教え子たちとの全人間的な触れ合いに惜しみなく一身を投じられた比類のない先生であった．”と，この恩師を回想されている．

昭和 26 年（1951 年）3 月，岡山大学理学部教授を辞職された．その後，東京に居を移し，昭和 49 年（1974 年）12 月までの約 23 年半，3 つの大学で 82 歳まで教鞭を執られた．

この間，『化学史談』シリーズの 9 冊，『化學史傳／脚注版』等を出版された．86 歳で亡くなるまで，ヨーロッパ旅行調査や書誌伝承に意欲的に取り組まれた．逝去される 2ヶ月前に，『化学史塵／化学史随筆集』を出版され，現世での区切りを喜ばれた．

山岡先生は，一括りできない広く深い導師と言える．その言動と雰囲気において，曰く，化学者，化学史研究者，教育者，そして，人格者，人間科学者，哲学者，….

“人が青春の時代に願うものは老年の時代に於いて充たされる”

以下，山岡先生の拠って立つところを個別に上げたが，畏敬の念を禁じ得ない．

ゴルドン将軍と山岡望先生

事を成す，あるいは生き抜くため，人は何をもって大義名分としてきたか?!

力こそ正義なのか?! “義を見てせざるは勇無きなり…．” 神の前での正義とは？

山岡先生は若くしてすでに，ゴルドン将軍の信教と行動にこの答えを見出していた．

宿命と言える環境にあっても，強さと優しさを発揮できたゴルドン将軍…．この博愛実践者に三度目の赴任要請が下った．しかし，明治 18 年（1885 年），スーダンのカルツームにて悲劇的な戦死，波瀾万丈の生涯を閉じた，と言われる．戦場でのゴルドン将軍は，銃剣に変え指揮杖と聖書を携えた，と伝えられる．明治 34 年（1901 年），徳富蘆花が『ゴルドン将軍伝』を出版し，その後，大正 7 年（1918 年）までに第 7 版を重ねる好評を得たらしい．

山岡先生は，英国滞在中の昭和 4 年（1929 年），ゴルドン将軍の墓所やゆかりの地を訪ねている．さらに，このヨーロッパ留学の帰路で，昭和 5 年（1930 年）にカルツームに足を伸ばしている．現地・現認による感慨は，『化学史窓』に崇敬と追慕の念で語られている．

“ひとその友のためいのちを棄つる，これより大なる愛はなし．”

山岡家の系譜や宗教心，山岡少年生得の感受性，一高時代の新渡戸稲造校長の薫陶への私淑，あの時代との遭遇…偶然も重複重層すれば最早宿命？必然？　これらは，山岡先生にとってまさに，“Planned Happenstance” であろう．多くの要素や体験が山岡精神の底流をなし，ゴルドン将軍への畏敬は，生涯褪せることなく周囲に語り続けられた．

『化学史談』と『化學史傳』

昭和 25 年（1950 年）3 月，六高の終焉と共に自分の使命も終わった．これから何をなすべきか？　この時，山岡先生に“本を書け，化学の歴史を書け．”という天命が聞えた．

山岡先生は，昭和 7 年（1932 年）に『有機化学構造論（上巻）』，昭和 9 年（1934 年）に『有機化学構造論（下巻）』を出版された．さらに，『有機化学反応論』の編述による構造と反応の体系化，そして『化学史』や『ゴルドン将軍伝』の執筆構想もすでに抱いていた．

しかし，収集した史料や蔵書の大半を岡山空襲で焼失させた．これは災いを転じての類と捉え，『化学史談』に紡ぎ出す本格的な作業を東京での再出発と考えられた．

また，昭和 2 年（1927 年）に上梓した『化學史傳』の拾遺集として，昭和 43 年（1968 年）に『化學史傳／脚注版』を出版された．

『史談』『史伝』の他，これらは『史窓』『史筆』『史塵』と繋がり，山岡先生の志向や言動を通して先人の思考や業績が明解に関連付けられており，化学と人間の歴史を伝承できる大事と称賛されている．

ペーター・グリースと山岡望先生

『化学史談』の第 I 巻で，『ペーター・グリースの生涯』を著述している．

山岡先生は，何故最初にペーター・グリースを取り上げたのか？“性格と経歴に見るべきものがあり，生涯が面白い．苦悩と改心の青年時代，コルベの傾注指導，誠実慈愛の師・ホフマンとの出会い，化学研究に没頭し，遂には生き甲斐やライフワークを摑む過程，これらを通じて師弟愛が育まれた，人間の愛を伝えられる．”と山岡先生は言われる．

巻頭に，“操山下の思出をともにする若き友たちにこの小著をささげます．”とある．

“人生意気に感ず”，生きるに足る人生の激励メッセージを認識できる．

ここでは，何故ホフマンの伝記作品は高く評価されるのか？について，師ホフマンが弟グリースのために書いた伝記が，いかなる背景・位置づけ・特長を有するのか？　を説き，さらに，19 世紀のヨーロッパの化学者達の国境を超越した学徳での交流，和気藹藹・親睦情誼，兄弟のような有り様を知り，“羨望に堪えない”と述べている．

山岡先生が挙げたグリースの経歴に，“19 世紀ドイツの化学者，アニリン系化合物誘導体・ディアゾ化合物を発見，その反応活性を利用し芳香族化学の合成テーマを拓き，アニリン染料の合成に応用し染料合成の反応基礎を築いた化学者”とある．

しかし，全体評価として，“派手な天才型の化学者ではない，潜在素養はともあれ，地味で黙々努力の化学者，身辺に前途有望な好青年を集め敬慕され強く感化する指導者でもなかった，むしろ人生を狭く限って唯一人，平静沈黙悠々の研究に耽った化学者”とある．

青年時代の 10 年を空虚にしたグリース…．その対照として，炭素原子価正四面体説を発表し立体化学の基を拓いた 22 歳のファン・ト・ホフ，炭素原子の四価説や連鎖説から有機構造論の萌芽を培っていた 27 歳のケ

クレ，等々を梅檀として挙げた山岡先生.
“一所懸命”，“改心復活”，“継続は力なり”を納得できる詳述が随所にある.

ブンゼンと山岡望先生

山岡先生は晩年のある日,“私が一番好きな化学者は,やはりブンゼンです．リービッヒはあまりに偉すぎて，ちょっとこわいですね…”と，鶴田先生の質問に答えられた.
“ブンゼンの伝記ほど人の心を温め，人の心を温かいユーモアに包むものはない．いかなる修業の結果，この敬愛すべき人格が磨かれたのか？”と語り，朝に Bunsen 夕にブンゼンの導きと守りのもと，六高奉職日々の目標とされた．六高化学教室では，講義室に石膏胸像，廊下に若い時の横顔，実験室に福徳長者のような笑顔のブンゼンが置かれていた.
リービッヒのギーセン化学教室に倣い，学生への徹頭徹尾の奉仕，恭謙な態度，平易懇切な講義，注意深く準備した説明実験，一人ひとりの指導に熱中し“Papa Bunsen”が本領を発揮したハイデルベルグ化学教室時代の 37 年を讃え，そして，独身の風変わりな生活ぶりまで，ブンゼン流と言える山岡先生.
“天然がいかなる資材を人類の幸福のために準備しているか？人類はこれらをいかにしてその繁栄のために活用しているか？”を自問，諸国遊学で見聞したブンゼン.
“ブンゼン自身の研究の進展によりあとから来る学生ほど幸福で賜物は豊富”
“ブンゼンの最大の発見はキルヒホッフである.”
まさに，後世畏敬と賦活促進の相乗効果を得て，ブンゼンは，無機化学，物理化学，地質鉱物学，地球化学，光化学，気象学，分析化学，電気化学へと研究対象分野を拡げた.
ブンゼン燃焼燈や水流ポンプの発明，分光器の製作，電気分解で新元素（Rb, Cs）を発見等，科学研究者に新しい方法や機器も贈っている．すべて 19 世紀のことである.
ブンゼンは，ひとり化学教室の二階を官舎とし，78 歳まで教壇に立っていた.

『山岡望傳』と鶴田禎二先生

鶴田先生は，“山岡先生の教えに一貫して流れるものは，‘豊かな人間性を持て’ということでした.”とおっしゃている．日本民族の価値観も多種多様，人それぞれ人生いろいろが常識のように言われる．農耕型社会の本分や原風景，これらが狩猟型社会の仕組みや基準に翻弄され，後付けで正当化される．享受する対極の気持に，“これでいいのか?!”が常に在る．人間性豊かな社会やそれを継承する文化や国是を尊重する一般大衆の苦悩や声無き声があり，異なる自然環境に生活する他民族他宗教でも本質は不変であろう.
鶴田先生を編者代表とする『山岡望傳』は，A5 版，本文全 382 頁，付記された山岡望年譜も懇切詳細で，あの時代，あの旧制六高，研究と教育の魂と実践，未来永劫に普遍の真理を伝承する大著，秀逸なる教育と歴史の書と言える.
一昨年，本著を精読し感激した私は，鶴田先生に下記のようなメールを書いていた.
“先ず，恩師の一生を伝記として纏める構想，各執筆者の原稿を物語の流れに乗せる編集，要所では自ら執筆され各論を充実させる調査，等に思いをいたし，鶴田先生のご苦労に感謝申し上げる次第です．山岡先生は，先人が化学に挑んだ姿と業績を繋がる化学史として研究し，彼らの発想や貢献，人生観や価値観の要諦を教育の場で発表された，これらの取組みは，まさに研究と教育を両立実践された，と思いました．化学環境，授業構想，教材準備，講義実験での山岡先生の滅私献身，六高梁山泊，化学史研究，星座観察，史跡探訪での山岡先生の生き甲斐，これらの行動力を支えた信念や正義の拠り所は？　万物への深い祈りと愛しみからほとばしる情熱なのでしょうか？”
折りに触れ読み直し，さらに理解を深めたい座右の書である.

おわりに

［第 1 話］では，日高敏隆先生が“個性と文化に優劣無し”とおっしゃった.
［第 2 話］では，山岡望先生が“先生の恩を後輩に施せ”とおっしゃった.
名言に我が意を得たり，と噛み締める.
今から約 3 年前，私は定年前後の時，これからの熟年人生を思う時，座右の銘として，“後生畏るべし，自分

以外皆師”，“師の恩を後生に還す，ご恩還しの連鎖を起こす”を掲げたからだ．さて，実行は?!　自己満足に近いが，実践の事例も少しずつ…．

小さな喜びを大きく感じる事例を紹介できる日の到来，自身にも期待している．

参照図書

①山岡望著『化学史談／総索引と増補』内田老鶴圃新社（昭和 45 年）
②山岡望著『化学史談Ⅰ／ペーター・グリースの生涯』内田老鶴圃（昭和 26 年）
③山岡望著『化学史談Ⅱ／ギーセンの化学教室』内田老鶴圃（昭和 27 年）
④山岡望著『化学史談Ⅲ／ブンゼンの 88 年』内田老鶴圃（昭和 29 年）
⑤山岡望著『化学史談Ⅳ／ブンゼンの 88 夜』内田老鶴圃新社（昭和 30 年）
⑥山岡望著『化学史談Ⅴ／ベンゼン祭』内田老鶴圃新社（昭和 33 年）
⑦山岡望著『化学史談Ⅵ／化学者の旅行日記』内田老鶴圃新社（昭和 34 年）
⑧山岡望著『化学史窓／ヨーロッパ旅行のアルバム』内田老鶴圃新社（昭和 46 年）
⑨山岡望著『化學史傳／脚注版』内田老鶴圃新社（昭和 43 年）
⑩山岡望伝編集委員会編（編者代表・鶴田禎二）
『山岡望傳／ある旧制高校教師の生涯』内田老鶴圃（昭和 60 年）

韓国との文化交流活動実績

佐藤　登（昭和 51 年電化卒・昭和 53 年修士修了）

秋田の『かまくら』をソウルで実現

2009 年 10 月から 12 月にかけて，韓国ではテレビドラマ「アイリス」が放映された．それと筆者の出身地である秋田県横手市の「かまくら」が共鳴するかのように，ソウルへの「出前かまくら」が実現した．2010 年 1 月 22 日から 24 日まで，ソウルの中心地，清渓（チョンゲ）広場に現れた大きな「かまくら」2 個は横手市からの「かまくら」職人 3 名の手によって堂々と完成し，「10 個以上のミニかまくら」はソウルの小学生が作り上げた．「かまくら」の文化を知っていただくことでの文化交流は，企画提案から 1 年 6ヶ月を経て関係者の熱意によって実行された．

雪は人工降雪機で降らせたものだったので湿り気が少なく，途中で川から水を運んで雪を固める必要があり，それも氷点下 15 度くらいの寒さの中，秋田から出張した「かまくら」職人 3 人もかなり苦労したとのこと．しかし完成した「かまくら」は立派な姿でお目見えした．

完成した「かまくら」をバックに（中央が筆者）

「かまくら」に入る順番を待つ観客

この発案は 2008 年 7 月，筆者が横手市長に提案したのがきかっけで南大門復興に向けたイベントとして文

化交流を行い，国宝復興工事を応援しようというアイデアから出発した．400 年前に水不足で飢饉に陥った際に雪の室「かまくら」を作り，水の神様を奉る文化行事であることから，放火で消失した南大門を守ろうという意図にあった．

今回は南大門よりも韓国からの観光客を発掘するための色彩に変更し，「アイリス」の舞台というスタンスで実行されたが，23 日のオープニングセレモニーは厳寒の中執り行われた．その日の夜 9 時の SBS にてトップニュースとして放映されたことで，翌 24 日には夕方までで 3000 人を超える観客が押し寄せ，主催者側を驚かせた．

同時に，この日も KBS を始めとする主要マスメディアが取材に訪れるなど，かなりのインパクトがあったことで大成功となった．

韓国ドラマ「アイリス」との関わり

2009 年 10 月 14 日から韓国ではイ・ビョンホン，キム・テヒ主演のテレビドラマ「アイリス」が放映され，視聴率は 30％以上を維持し，日によっては 40％を超えた．これまでのテレビドラマの中で最高視聴率を記録しながら 12 月中旬に放映が終わった．

全 20 話のうち，上海やハンガリーも舞台となり，更に冬の日本の雪景色が必要とのことで秋田が選ばれロケの拠点となったが，秋田を舞台とするシーンは韓国では昨年 10 月までに放送が終わり，その後に大変な反響を呼び大きなうねりを生じた．

秋田を代表する男鹿半島，阿仁の山々，日本一深い湖の田沢湖，その山間に位置する乳頭温泉郷，そして重要無形文化財となっている「なまはげ」，「かまくら」等々がドラマに出てきたが，地元や近隣では有名でも，日本の中でも十分に知れ渡っていないのも事実である．そんな秋田の自然と文化を宣伝してくれたのが「アイリス」である．

しかしロケ地として，この「かまくら」は元々計画にはなかった．横手出身の筆者としては折角素晴らしい 400 年もの歴史のある「かまくら」はロケには向いているのではないかと思い，筆者と韓国人コーディネーターがドラマ制作会社へ直接働きかけたことで，ロケ地として横手城と「かまくら」が採用されるに至った．主演同士がこの「かまくら」を背景にデートする重要な場面に活用され，意味のある光景として放映された．

景気低迷の中，韓国から日本各地への旅行客の出足は鈍く，旅行業者も弱音を吐いていた中で，アイリス効果によって秋田へのツアーの問い合わせや申し込みが急増した．

その証拠に，ソウルと秋田を結ぶ週 3 便の大韓航空直行便は，もともと 143 席の機材を飛ばしていたが，11 月には一部，187 席に機材変更をして，更に 12 月は全便 187 席，そして本年 1 月 2 日から 3 月 1 日までの月曜便と土曜便はなんと 283 席に機材変更をした．搭乗率は 90％近いという．それまでは搭乗率 60％くらいで低迷していた路線が急にこのような状況になった．

2 月の「かまくら」と横手城

「アイリス」のシーンに採用された「かまくら」

既述のように本年 1 月のソウルでの「出前かまくら」のイベントが終わって，2 月 12 日からは横手での「かまくら」行事へと続き，筆者にとっても格別な「かまくら」という意味で今年の「かまくら」へ 12 年振りに足を運んだ．久し振りに訪れた「かまくら」は，冬の秋田を幻想の夜に造り替えていた．そして以前とは違って韓国人の姿が多かったことでドラマの効果を自ら実感した．

日本では2010年3月から7月までCSでの「アイリス」が放映され毎週見たが，内容と光景が素晴らしく調和しているし，BGMもすこぶる良い．4月からは地上波での放映と，毎月のように関連したイベントが国境を越えて繋がった．私の周辺にも多くの「アイリス」ファンがいて，見逃すことができないという声が多かった．

この「アイリス」はあまりにも人気を博し，制作側ではPart 2を企画した．ドラマの最終回で主演が生きているのか死んだのか不明のまま終わるというところに，制作会社の戦略が見える．

折角の冬の秋田で盛り上がった本ドラマのPart 2では，夏の秋田の別の顔を登場させることができないか思案している．そこにはまるで違う夏の秋田があることと，ドラマのシーンとしてマッチする素晴らしい芸術文化があるからだ．

その候補に最も相応しいものが世界一の大曲の花火大会である．今はBS放送によってライブで見られるようになっているが，この花火大会の開始のもとでそのドラマが始まるのである．花火に仕掛けられた主演の生存を示すメッセージが夜空に現れ，それこそドラマティックにストーリーが運ぶ展開である．すなわち，世界一の花火にオープニングを託すという仕掛けである．Part 2への繋ぎ役に花火大会を活用すれば，ドラマの効果が花火の大輪のように一層高まるのではないかと考えている．

ドラマの抜群の宣伝効果に感謝することは当然であるが，それだけでなく，そこからまた大きな新しい次元で文化交流が始まることに期待したい．そのためにも積極的な企画提案が必要だ．日本文化も都市と地方ごとに，まちまちであるだけ魅力も多く，今回の「アイリス」がモデルとなって日本の各地に海外から観光客が押し寄せるようになってほしい．

著者紹介　1976年学部卒，78年修士課程修了後，本田技研工業(株)入社．社内研究成果により88年東京大学工学博士．97年度名古屋大学非常勤講師兼任．99年から4年連続「世界人名事典」に掲載．(株)本田技術研究所チーフエンジニアを経て，04年9月からサムスンSDI(株)へ常務取締役としてヘッドハンティング入社．エネルギー研究開発部門統括を経て経営戦略担当．05年度東京農工大学客員教授兼任．2008-2010年秋田県学術顧問．HP:: http://members.jcom.home.ne.jp/drsato/ 日韓比較文化新聞連載記事全文掲載中．